(13)


| | |
|---|---|
| 氏名(生年月日) | 戸塚陽子（トツカ ヨウコ） |
| 本籍 | |
| 学位の種類 | 医学博士 |
| 学位授与の番号 | 乙第765号 |
| 学位授与の日付 | 昭和61年4月18日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当（博士の学位論文提出者） |
| 学位論文題目 | **無脳児における胸腺の解剖学的研究** |
| 論文審査委員 | （主査）教授　串田つゆ香 |
| | （副査）教授　梶田　昭，教授　香川　順 |


## 論文内容の要旨


目的

従来，無脳児の胸腺が大であるという報告はなされていたが，それらの多くは摘出した胸腺の計測および組織学的検索に限られていた．

本研究においては，無脳児の胸腺の 1）重量 2）局所解剖学的検索（立体的な大きさ，周囲器官との関係）および 3）血管系についての詳細な剖出を行ない，正常対照例の文献と比較，考察した．

対象および方法

対象は男児9例，女児5例，計14例の無脳児である．実体顕微鏡下に，各症例における無脳児の胸腺についての詳細な剖出を行なった．

観察結果

1）重量；各症例における胸腺の重量は，固定後のもので0.04gから14.5gであり，その体重比は0.7‰から6.9‰である．国友らによる正常10胎月平均2.82～4.46‰と比較すると，10例が平均以上であった．性差および体重との相関はとくに認められなかった．

2）局所解剖学的検索；本症例の胸腺は主として上縦隔および前縦隔に位置するが，その上縁は比較的高位のものが多く，第一肋骨より上方に位するものが13例あり，そのうち10例は甲状腺下縁に接し左腕頭静脈を圧排している．

胸腔内における胸腺の位置は多様性を示し，偏平に前縦隔に拡がる型，後方へ広く拡がる型および上縦隔をその大半が占める型に区別することができる．そのうち4例においては，とくに大きな胸腺が肺門部に達するという特徴的所見が認められた．

しばしば胸腺の拡がりに応じて肺に圧排がみられ，中でも右肺上葉が胸腺右葉に圧排され，後方に位するものが7例において認められた．

3）血管系；各症例における動静脈分布状態は正常胎児例と比較し，とくに変化は認められなかった．すなわち胸腺への動脈は，内胸動脈胸腺枝13例，腕頭動脈4例，総頸動脈3例，上行大動脈2例および上甲状腺動脈1例であった．これらの動脈の多くは，頚部から第二肋骨の高さまでの比較的高位で分枝し，胸腺へは主として側方から，しばしば後方からも侵入している．

胸腺からの還流静脈は，腕頭静脈13例および上大静脈2例であり，いずれも胸腺後方からおこる．その他，細小静脈が下甲状腺静脈および内胸静脈へ還流している．

結論

無脳児14例における胸腺の解剖学的検索の結果，つぎの所見が得られた．

1）胸腺の重量は，10例において平均以上であった．

2）胸腺の位置は胸腔内において多様性を示し，前額面上で拡がるのみならず，肺を圧排し立体的な拡がりを示す．しかも肺門部まで達するものが4例に認められた．

3）胸腺の血管系は動静脈共に正常例と比較し，とくに大なる変化は認められなかった．

# 論 文 審 査 の 要 旨

本論文は，14例の無脳児の胸腺についての詳細な剖出を行ない，重量計測，局所解剖学的検索および血管系の観察を行なったものである．その結果，無脳児の胸腺は形態的には正常胎児例と比較し，より発達していることを示唆する結論が得られた．

学術上価値ある論文と認める．

**主論文公表誌**

無脳児における胸腺の解剖学的研究
東京女子医科大学雑誌　第56巻　第1号
45～64頁（昭和61年1月25日発行）

**副論文公表誌**

1）学童の身体計測による成長曲線の作製と，骨年齢評価の有用性について
小児保健研　36（2）87～91（1977）

2）体位楕円を用いた学童体位の検討
小児保健研　36（4）201～204（1977）

3）重複奇形児の解剖学的研究—重複奇形児における外表奇形の鏡像形成—
東女医大誌　55（1）9～22（1985）

4）無脳児の解剖学的研究　第1報　胸骨筋について
東女医大誌　55（4）1～8（1985）